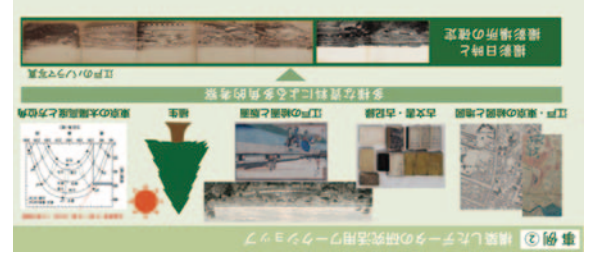


資料分析の例：植生史や地球科学の知見を導入し、文理連携による写真資料の解明を試みる



歴史学・民俗学・考古学といった「過去」を対象とする人文科学と同じく、古地震学・古気候学・植生史といった「過去」を対象とする自然科学においても、近年、関連分野との協業が強く求められています。「過去」の研究において、文理を超えた連携の重要性が増す中で、大学・博物館等の資料は文理の連携研究の軸となりうるものですが、まだまだアセスは困難なままです。これらの連携研究の支援と実際の研究主力を「総合資料学」で構築します。

1 課題 大学・博物館等の資料の文理横断研究

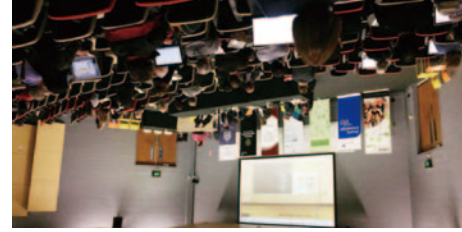
実物写真の原本原拓本を大量に納める複写図録『勝海閣集古帖』（座博蔵）の公開前処理



大学や全国の歴史や民俗や民俗を対象とする博物館には、記録資料、美術作品、「モノ」資料、自然史資料といった、さまざまな性質の資料が収蔵されています。それらから取り出せる情報は多様であり、多くの研究成果があります。しかし、これらの資料はその多様性ゆえに、分野の異なる研究からのアセス入手手段の確立が困難です。また、研究成果に対して、その根拠となる資料を公開することも求められています。この課題にこたえるため、しこくみを構築し、歴史的資料や研究成果の「オープンサイエンス化」を目指します。

2 課題 研究成果の根拠を手の届く形に

日本とくらべ、海外では資料情報の共有が大きく進んでいる



日本列島の歴史は、東アジアをはじめとする「海外」への交流の歴史でもあります。日本の歴史の研究が海外で行われることは、海外における日本理解のために重要なことです。しかし、世界の東アジア研究では、資料情報のデジタル化が進んだ中国・韓国・台湾研究者は増える一方で、資料へのアセスが難しい日本研究者は減少しています。とりわけインターネットなど親和性の高い若い世代において、その傾向はより顕著です。次世代の世界の日本研究者に向けた、日本の歴史・文化資料へのアセス環境の改善を目指します。

3 課題 海外における日本研究の活性化

気仙沼市での文化財レスキューの様子 [2011年4月～8月]



東日本大震災や熊本地震は、被災地の歴史民俗系博物館にも甚大な被害をもたらしました。目録と文化財とともに失われた地域も多く、災害の多い国での文化財保存の重要性を再認識することとなりました。そこで私たちは、全国745*の歴史民俗系博物館を擁する「歴民協」を立ち上げ、被災地支援の体制づくりと博物館情報の共有を進めてきました。こうした情報共有への学術的な肉付けも「総合資料学」の大事な仕事です。
*2016年6月時点

4 課題 災害時の大学・博物館等の情報のバックアップ

歴博発、日本の歴史研

いま歴博は、「日本の大学・博物館の4つの課題」を解決し、日本の歴史研究を飛躍させるための新たな学問、「総合資料学」の創成をめざしています。

"Integrated studies of cultural resources"

総合資料学



自然科学の手法を用いたさまざまな資料の分析

「総合資料学」の創成へむけて

情報をお寄せください
(大学・博物館等の資料目録等)



現在歴博では、全国の大学・博物館等の資料情報を収集するとともに、デジタル化、英訳などの工程を経て、日本全国の資料情報を必要とされる場所へ提供するための情報基盤を構築しています。

諸事情により公開することの難しい資料についても、**非公開情報としてバックアップ**することで、万一の際には、資料の復元・修復等に必要情報を速やかにご提供することができます。

情報の形態は、冊子・データを問いません。ぜひ、「総合資料学」ならびに資料情報基盤構築にご協力くださいますようお願いいたします。

国立歴史民俗博物館 メタ資料学研究センター
☎043-486-4220 (直通)
<http://www.metaresource.jp/>



2016.09

究を次のステージへ

一見無価値な「ニセモノ」も詳細が明らかになればその含意や需要などが学術的な研究対象となりうる



歴博に総合資料学のための「メタ資料学研究センター」を新設し、大学や博物館等と協働してワークショップを重ねながら、研究と歴史資料の新しい関係を創り出しています。

課題1 大学・博物館等の資料の文理横断研究

課題2 研究成果の根拠を手の届く形に

課題3 海外における日本研究の活性化

課題4 災害時の大学・博物館等の情報のバックアップ

総合資料学を实践する「研究循環アクセスモデル」のためのワークショップ

歴博のめざす「総合資料学」は、資料情報へのアクセスの多様化から始まります。ある研究から得られた資料情報が、次の研究の材料として循環していく、研究と資料の新たなサイクルを創ります。

課題1

また、資料情報への外部からのアクセスを確保することで、研究成果の「根拠（エビデンス）」の参照を容易にします。

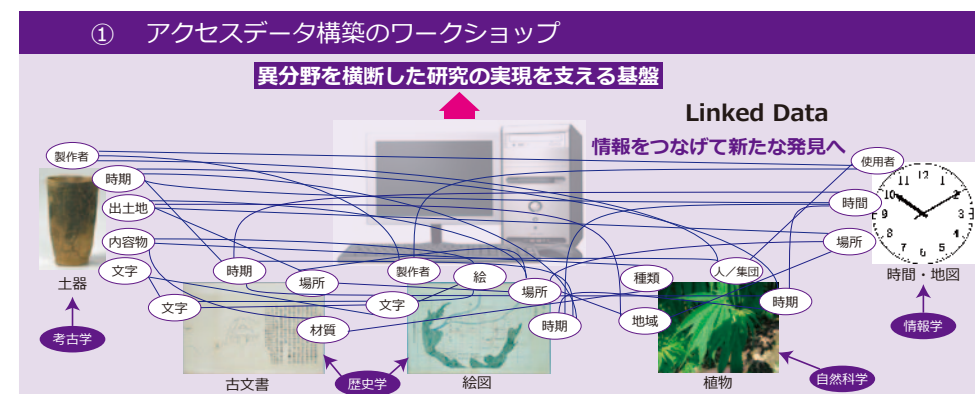
課題2

これまで歴博は、歴史研究と館内展示を相互にフィードバックさせる「博物館型研究統合」を掲げ、文系・理系の枠を超えた研究・教育・普及活動に進んできました。こうした歴博の長年の蓄積が、「研究循環アクセスモデル」を構築する基礎となっています。



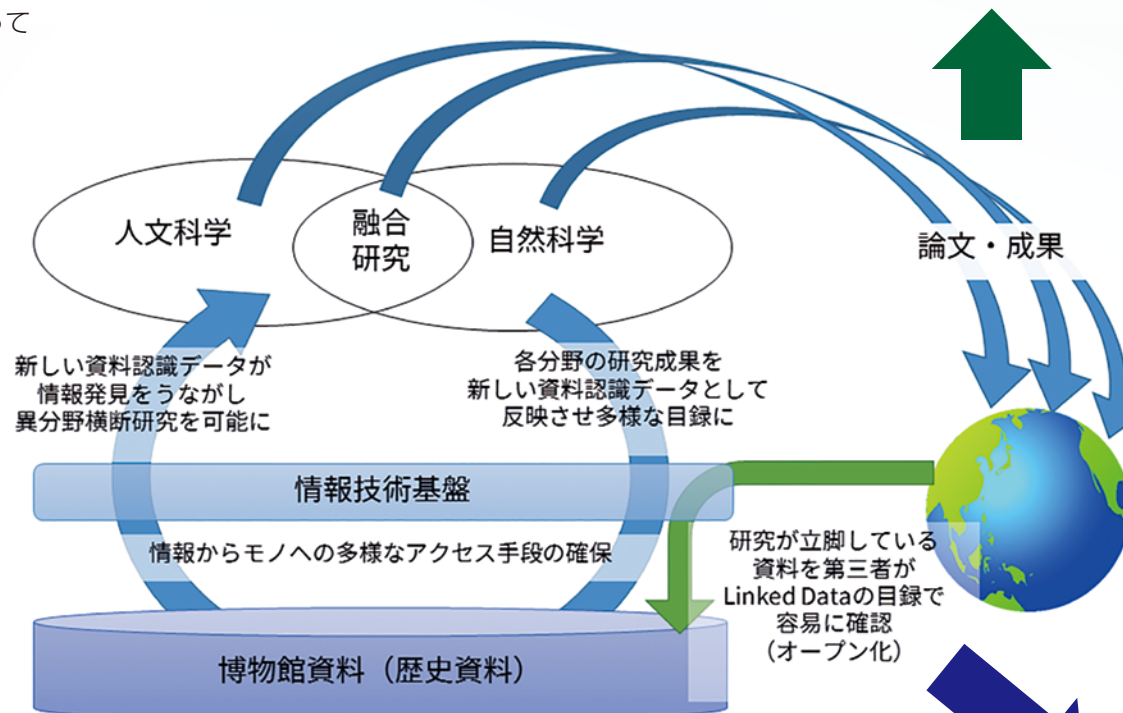
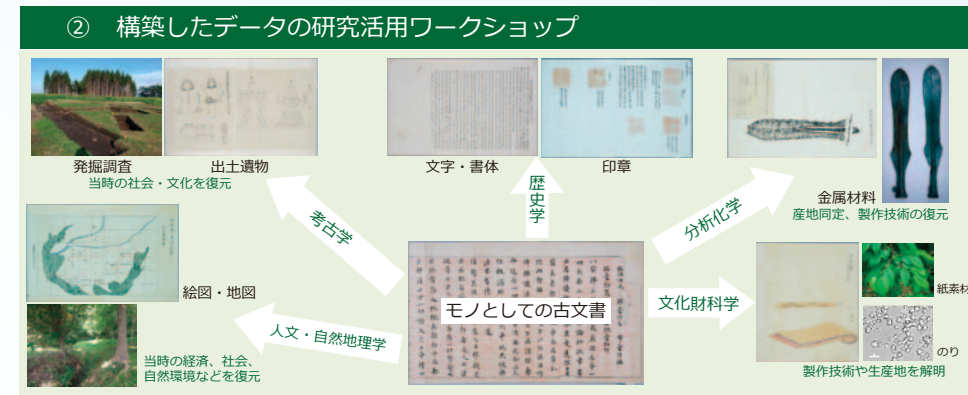
ワークショップ1

ワークショップ1は、資料から得られる多様な情報を、新たに情報基盤環境として整備するためのものです。研究に基づいて抽出・蓄積した資料情報へ、外部からアクセスする環境を整えるためのノウハウを分析・蓄積します。



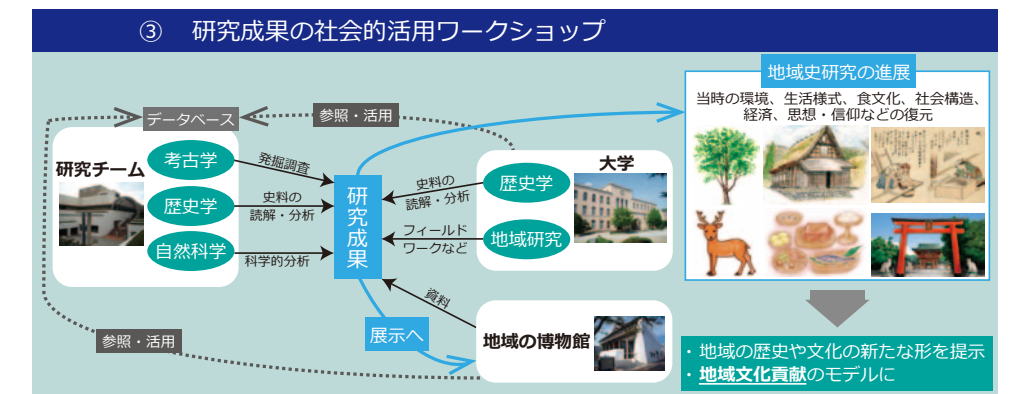
ワークショップ2

ワークショップ2は、「モノ」としての歴史資料に注目し、文系・理系の研究者が集的に研究討議するものです。一つひとつの資料から今まで以上に豊かな情報を引き出し、それをさまざまな学問分野に還元します。



ワークショップ3

ワークショップ3は、大学や博物館等とともに、「総合資料学」に基づく研究成果を地域社会に還元するモデルを作ります。ワークショップ1および2の成果をもとに、各大学・博物館等を通じて地域歴史像を解明し、研究成果を発信するとともに、教育プログラム・展示による普及活動などのアウトリーチを行います。



国際発信・研究連携

資料情報の英訳をすすめ、海外の日本研究者や東アジア研究者が、日本国内の資料によりアクセスしやすくなる環境を整えています。また、歴博では既に39の海外の大学・博物館等の研究機関と提携し、共同研究や共同展示、国際シンポジウム等を計画・実施しています。

課題3

大学・博物館等との連携と総合資料学

歴博は、「総合資料学」の取り組みにおいて国内外の関係機関との連携をとりわけ重視しています。総合資料学が展開する、各大学との連携による共同研究、各大学・博物館等との連携によるデジタルネットワークの構築は、災害に備えた資料のバックアップにも役立ちます。

課題4

